

【シンポジウム「ローカルなもの生き延び方―現代における人形義礼の再脈化」】

シンポジウムの概要

姜 竣

私たちが耳を傾けるさまざまな声のなかに、

いまでは沈黙してしまっている声の筈が混じってはいない
だろうか。

ベンヤミン

なぜ「ローカルなもの」たちは負け続けなければならないのか。その敗北にどのような意味があるのか。かつて私は紙芝居研究で、ローカルなものを小川徹太郎（『越境と抵抗―海のフィールドワーク再考』二〇〇六、新評論）に倣って「民衆」という概念で捉えたことがあった（『紙芝居と〈不気味なもの〉たちの近代』二〇〇七、青弓社）。民衆は、支配体制の中で従属的な位置を占め、多様な権力作用に抗するその様々な試みがたいていは失敗に終わりながらも、ときには状況を打開し構造を変革する事態の道を開くこともあるような、社会的弱者の力を出来事に即して評価するための概念である。たいていは失敗に終わりながらも時には状況を打開するきっかけをもたらすこと

へのメシア的な信頼、それが民衆とその文化を見つめようとする者の根拠である。

私はその信頼を、根源的な危機の中から見出せる「救済＝解放」に対するメシアニズムへの信頼を説いたベンヤミンの歴史哲学から学んだ。ベンヤミンが批判してやまない歴史主義は、進歩を歴史の規範とみなすため、かつての勝利者の遺産相続者であるその時々々の支配者に同調する。それに対する歴史的唯物論にとって過去は、それが認識可能となる刹那に一瞬閃きもう二度と立ち現われはしない、そうしたイメージとしてしか確保することができない代物であって、むしろ支配階級の道具と化すという危機の瞬間に思いがけず立ちあらわれる。支配者すなわち勝利者の戦利品としての歴史を「逆なですること」が歴史的唯物論者の使命である。今いる現在から過去の一点を根気よくじつと見つめると、ある瞬間に進歩の時間が止まり、思わぬ方向へ未来の可能性が拓かれる。時計のごとく不可逆に進む時間に対する、祝祭の日に繰り返し回帰する記念碑的な時間に目覚めるときにこそ民衆の敗北の意義が宿る。

関根康正が主導するストリート人類学は、そうした時間の問題を「敗北したローカリティ」と「勝利するローカリティ」とに對比させながら空間論的に展開した。敗北したローカリティとは、西洋近代型の近代化や世俗化に押しながされて命脈を絶たれ解体されつつあるものを指す。ところで、グローバル資本主義が世界各地のローカルな生活世界をも市場化する状況の下、

その土地の生活全体に深く埋め込まれていた前近代のあり方の中から、グローバル市場に通用するようにパッケージ化された「勝利するローカリティ」も生まれている。それは復古的色彩をもった更なる近代化であり、そうした再帰的近代化現象の輝きの蔭にますます身を隠されてしまいうローカルな生活文化の有り様が敗北したローカリティで、歴史の勝利者の発想に与しない敗北者の微妙なあり方が有する可能性を発掘し開拓することがストリート人類学の使命であって、それに導かれて人の見残したものを、「落ち穂拾い」をするのである。

私は近年、門付けの人形芝居の再生に焦点を当て、一度消滅しかかった儀礼芸能が現代に復活した過程とその背景を明らかにしつつ、門付けの伝統に対する担い手たちの意識や彼らに対する社会的期待感を実証的に研究している。

ジェーンマリー・ローによると、戦後、「日本の過去を取り戻す」運動は郷土芸能の復興に焦点を当て、文化財保護行政、民俗学運動、さらにディスカバー・ジャパンのようなツーリズムによって実行された。漂泊芸能民が担う門付けの儀礼芸能は、消滅の背後に被差別状況が横たわっており、だからご神体であり生きる術であった人形はステイグマのシンボルとして封印された。その復興の過程で行政、学問、社会は、担い手たちが伝統的に果たした儀礼上の役割の本質的要素、即ち体制外者の漂泊性と他者性が清祓体系の中で發揮した力を正当に評価できないため、復活を願う門付け芸人たちの伝統への郷愁と、漂泊芸

能民としての被差別経験の狭間に横たわるアンビバレンス、または、地域の誇りである事と社会的烙印である事の矛盾に光を当てられない。アンビバレンスを孕んだ人形遣いたちの「経験としてのノスタルジア」は、戦後の文化行政と民俗学運動がスキーム化し、ツーリズムが消費化した「日本人」というアイデンティティの原動力である「イデオロギーとしてのノスタルジア」の蔭に隠べいされてしまうのだ。

元来懐旧に伴う痛みを意味するノスタルジアという感情は、物理的場所としての故郷を喪失すると、時間上の過去を指しつつ憧憬へと変わり、地理と歴史を交換可能なものにする。郷土芸能の復興と観光化がそうであるように、人は奥地に向かって空間を移動することで時間を遡るといふ倒錯に陥り、忘却を伴って過去を美化する。ノスタルジアという時空連続体において時間と空間が纏綿する問題は未だ十分解明できていないが、それを見損なうとローカルなものたちが負う「痛み」は解消されない。

単なる移行点でしかない、均質で空虚な時間をたどり続ける歴史の連続を打ち砕いて、抑圧された過去のいまここに唯一無二の存在としてあるものを救済し解放すること（ベンヤミン）。ネオリベリズムが席卷する世界資本主義の下で、パッケージ化により勝利する道を進まない、敗北したローカリティの生き延び方を追究すること（関根康正）。イデオロギーとしてのノスタルジアの蔭に隠べいされてしまった経験としてのノスタルジアを救い上げること（ロー）。これらを指針として、あらゆるも

のがナシヨナルな次元を疾うに超えた諸力に浸食され、断片化し流動化しつつある状況下で、向き合うべきローカリティとはなんであるかを考えたい。その際、われわれの認識と方法から抜け落ち、やり過ごされ、語りえなかったものの生き延び方の前衛性に着目する。

参考文献

ヴァルター・ベンヤミン

一九九五「歴史の概念について」「歴史哲学テーゼ」「ベンヤミン・コレクション①近代の意味」久保哲司ほか訳、筑摩書房

関根康正

二〇〇九「パッケージ化と脱パッケージ化との間での生きる場の創造、あるいは「組み換えのローカリティ」「資本としての知識」から「資源としての知識」への視点の移行がもたらすもの」関根康正編『ストリートの人類学 下巻』国立民族学博物館

ロー、ジェーンマリー

二〇一二『神舞い人形―淡路人形伝統の生と死、そして再生』

齋藤智之訳、私家版

※本シンポジウムの内容は、平成二十七―二十九年度にJSPS科
研費JP15K03066の助成を受けた研究（「人形芝居における儀礼
の復活と門付の伝統に関する研究―淡路人形芝居を中心として」
研究代表者・姜竣）の成果の一部である。

（かん・じゅん／京都精華大学）

【シンポジウム「ローカルなもの生き延び方―現代における人形儀礼の再文脈化」】

門付けの「継承」と「復活」のはざままで

―阿波徳島「三番叟まわし」の再興ともうひとつの記憶

森田 良成

はじめに

徳島県には「三番叟まわし」と呼ばれる門付け芸がある。四体の木偶（千歳、翁、三番叟、エビス）を木箱あるいは行李に入れて運びながら、正月に決まった家々を廻り、人形遣いと鼓打ちのふたりが一組となって「三番叟まわし」を舞うことで、新年の祝いを届ける。

一九六〇年代から七〇年代にかけて多くの芸人が廃業したことに伴い、三番叟まわしの歴史は一度は途絶えかけた。「芝原生活文化研究所二〇一六、辻本二〇〇八」。「阿波木偶箱まわし保存会」（以下、保存会）は、「徳島県独特の祝福芸や門付け芸等の無形民俗文化財調査研究」を目的として一九九五年に発足し、この芸能を再興するための活動を展開して現在に至っている。「三番叟まわし」の門付けを二〇〇二年からは保存会が担っており、二〇一八年では新正月と旧正月を合わせて千軒以上の